

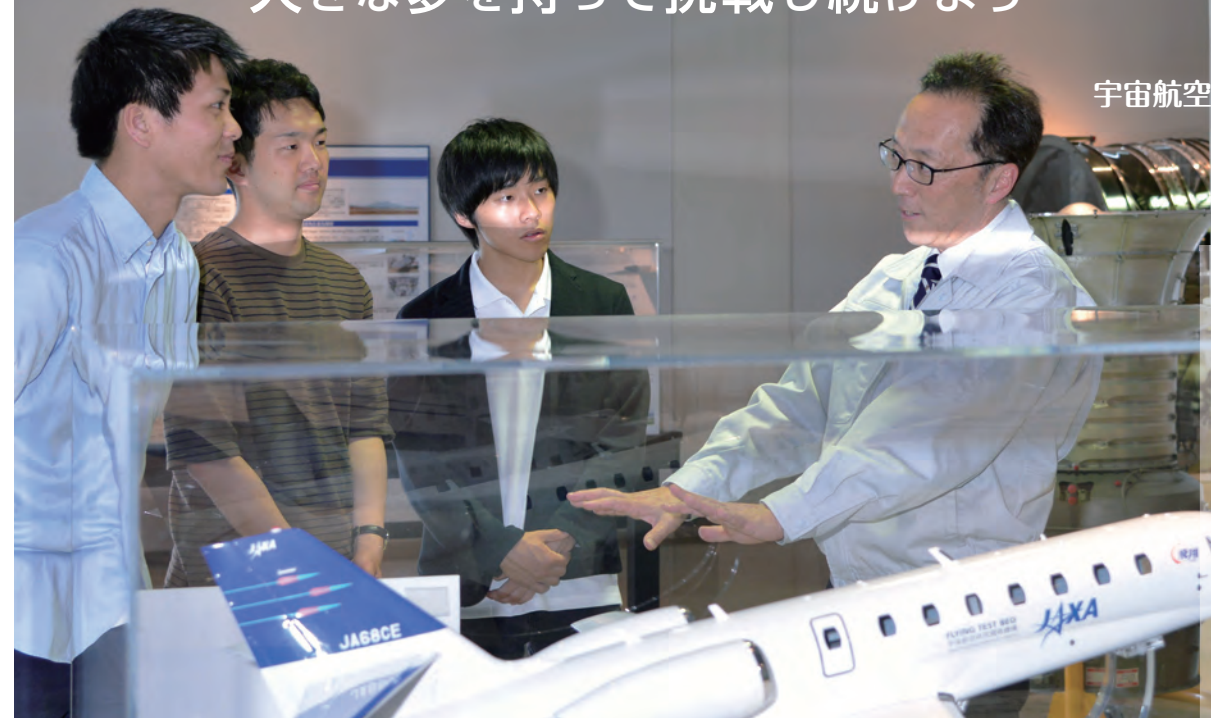
# 宇大生よ、誇りを持って！ 一大きな夢を持って挑戦し続けよう

OB.OG. INTERVIEW

国立研究開発法人  
宇宙航空研究開発機構 (JAXA)  
理事・航空技術部門長

Hisashi SANO  
**佐野 久**

**PROFILE**  
1986年、早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了。同年、本田技研工業株式会社入社。本田技術研究所附属。95年、宇都宮大学大学院博士後期課程生産・情報工学専攻修了。2009年、Honda R&D Americas, Inc Ohio Center, Division Director (車両実験室部門責任者)。11年、同Division Director (戦略技術企画室部門責任者)。16年、株式会社本田技術研究所上席研究員(兼任)。18年、JAXA理事・航空技術部門長 (現職)

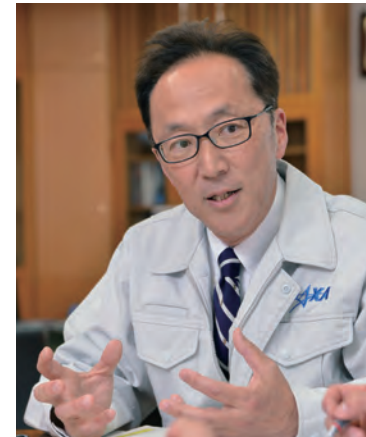


宇宙航空研究開発機構 (JAXA) で最先端の技術研究に携わる佐野久さんを本学工学部の学生取材スタッフが訪ねた。1992年に企業に所属しながら本学大学院博士後期課程で学び、今年4月からJAXA航空技術部門長として活躍中の佐野さんから、宇大大学院在籍時のエピソードや研究開発について、そして技術者としての高い志と熱い思いを伺うことができた。(写真右から佐野久さん、取材アシスタントの電気電子工学科4年 白石達也、工学研究科電気電子システム工学専攻博士前期課程2年 林 知史、機械システム工学科2年 石川剛志 / 2018.6.1取材)

## ■ 宇大の社会人ドクター1期生に

宇大の大学院にお世話になる直前、私はホンダで研究開発に従事していました。ホンダの四輪開発の総本山は栃木研究所。皆さんのキャンパスのすぐ近くで全世界の研究開発がおこなわれています。当時、私は振動騒音、乗用車の音と振動についての開発をやっていました。アクティブノイズコントロール (ANC) という、音で音を消す技術があり、それを車で使えないかという研究をしていました。最先端の研究だったので技術的な困難に阻まれていたところ、1992年に宇都宮大学で博士後期課程が新設されました。通常の課程に加えて、社会人ドクターコースが新設されたこともあり、ホンダに籍を置きながら、ANCの研究過程で生じた課題解決をテーマに大学院生として学ぶことになりました。

私が所属することになったのは粕谷・足立研究室でした。当時粕谷英樹先生 (本学名誉教授) が教授、足立修一先生 (現慶應義塾大



学教授) が助教教授でした。粕谷先生が音声響工学の専門家、足立先生が制御工学の専門家、ANCを深く研究する上で最適な環境でした。当時足立先生は34歳、私は33歳で、足立先生とは1歳しか歳の差がありませんでしたが先生の膨大な知識量には圧倒されましたね。粕谷、足立両先生に支えられ、多くの研究室の学生と研究を進めていくことは本当に大きな刺激になりました。博士後期課程は3年半で無事修了しましたが、その後も宇大とは10年近く共同研究をすることとなります。宇大との共同研究が、ホンダのANCの実用化を支えたといっても過言ではないでしょう。

## ■ 宇大で印象に残っていること

やはり優秀な先生方との出会い、粕谷先生、足立先生との出会いが一番ですね。二つ目はキャンパスが静かで研究にふさわしいし、一



宇大工学研究科博士後期課程時代の佐野さん。当時の粕谷・足立研究室の栗山村 (現日光市) での秋合宿で (1992年10月撮影/写真提供: 慶應義塾大学 足立修一教授)

人ひとり丁寧に指導してくれるところ。宇大は国立大学なので、研究スペースが広々と使えて、学部4年生の学生にも机があるなど、充実した研究環境は当時から驚きでした。生協にもよく行きましたよ。豚汁うまかったよね (笑)。

## ■ 継続は力なり

長きにわたりANCをテーマとして研究してきましたが、そこで学んだことがあります。それは『継続は力なり』であり、『新しい研究テーマをモノにするには10年はかかる』です。ホンダも業績に恵まれない時期があり、博士後期課程在籍時、私も日常はANCとは無関係の開発業務に専念していましたが、宇大ではANCの研究を「細く長く」進めていきました。業績の回復をきっかけとしてANCの研究再開が認められましたが、研究を継続していたことにより、研究を勢いよく再開することができたわけです。

そして、『新しい研究テーマをモノにするには10年はかかる』。

## ■ JAXAの理事として

なぜ自分がJAXAに呼ばれたのか、自分でもよくわからないんですが (笑)、この3月までホンダのアメリカの研究所 (Honda R&D Americas Inc) に約10年間駐在していました。業務の中心はリサーチマネジメントで、ホンダの将来のためにどのようなテーマをもって開発を進めていくのか、要は出口戦略の立案、検討ということになるかと思えます。ホンダでのリサーチマネジメントの経験、成果を評価していただきJAXAによっていただいたのでは自分では思っています。

JAXAに着任して3カ月、改めてこの組織の「凄さ」を日々感

じる毎日です。航空部門は宇宙部門と比べて皆さんにはあまりなじみがないかもしれませんが、例えば晴天時の乱気流検知技術など、航空分野における身近でかつ素晴らしい成果をたくさん出しています。これらに加えて「静かな超音速機」や「電動航空機」などの世間に「驚き」をもって迎えられるような技術をさらに展開していきたいですね。

## ■ 宇大生よ、誇りを持って！ — 宇大生へのメッセージ —

まず、宇大は素晴らしい大学です！素晴らしい先生と研究環境があり、その成果は世界に通用します。なので、宇大生には誇りを持ってほしい。まずそれが一つ。二つ目は大きな夢、高い志を持つてほしい。「世界一を目指す！」ぐらいの気概が必要です。そして、その夢に向かって学び続け、挑戦を続けてほしいですね。

そして、皆さんのほとんどは何かの組織に属して活躍することになるでしょう。当然大なり小なり壁に直面することと思います。その時に決してあきらめないでほしい。壁を乗り越えようと大きく成長します。もし、挫折しそうなほど大きな壁に直面したら運動して汗を流しましょう。精神的な疲れと肉体的な疲れのバランスを取るとよく眠れます。そしてまた挑戦！皆さんのチャレンジに期待していますよ！

## 取材を終えて

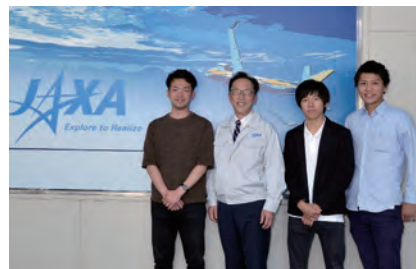
工学研究科電気電子システム工学専攻 博士前期課程2年 林 知史  
今回の取材を終えて、「夢」の大切さとその「夢」に対してどのように「情熱」を注いで行動するかを考えさせられる機会となりました。学生生活並びに今後の人生において、「夢」と「情熱」を抱いて歩みたいですね。

電気電子工学科4年 白石達也

佐野さんはとても気さくな方でリラックスした状態でインタビューすることができました。途中、専門分野に関して議論が白熱し、佐野さんの技術者としての魂を感じる場面もありました。佐野さんがおっしゃるように宇大生としての誇りを持って、今回の貴重な経験を今後に生かしていきたいと思えます。

機械システム工学科2年 石川剛志

とても気さくな佐野先輩の人柄が印象に残るインタビューでした。母校で印象に残っていることを一つ聞いたところ、優秀な先生との出会い、キャンパスが静か、学食の豚汁 (笑) と3つもお答えを頂いたあたり、強い母校への愛を感じました。「夢は何ですか？」と私達に問われたのが非常に印象的でした。



JAXAの一室で学生たちのインタビューに応じる佐野久さん